



近畿大学薬学部 創薬科学科 薬用資源学研究室

話し手：松田 秀秋 教授

Hideaki Matsuda

50年以上の歴史があり、約8,000人の卒業生を輩出してきた近畿大学薬学部。2011年9月に薬学部新校舎の39号館が竣工しましたが、キャンパスの並木道と薬用植物園はいつも変わらず、季節の移り変わりを教えてくれます。今回は、創薬科学科薬用資源学研究室の松田秀秋先生に、薬学部の現在と新たな取り組みについてお話を伺いました。



2011年9月に新造された薬学部新校舎(39号館)。11階建ての校舎には、最新の設備を備えた講義室や実習室、研究室が揃っています



薬用植物園のナツメの木を背景に、松田秀秋先生(中央)と薬用資源学研究室の皆さん

学校メモ

- ◇昭和24(1949)年 大阪専門学校と大阪理科大学を母体として近畿大学設立
- ◇昭和29(1954)年 薬学部を設置
- ◇昭和55(1980)年 薬学研究科修士課程開設
- ◇昭和60(1985)年 薬学研究科博士課程開設
- ◇平成18(2006)年 医療薬学科(6年制)と創薬科学科(4年制)設置
- ◇1学年の定員 医療薬学科150名、創薬科学科30名。現在の在校生は学部1,130名、大学院42名(内2012年4月の入学人数は学部219名、大学院23名)

サイエンスの力を持つ薬剤師の育成

近畿大学薬学部は昭和29年に設立され、平成18年に6年制と4年制の2学科制となりました。6年制の医療薬学科では医学部と附属3病院と連携して薬剤師の育成を目指し、4年制の創薬科学科では薬学研究の人材育成を目指しています。

薬剤師は、薬物治療に際して化学構造や薬物動態を踏まえて考えることが必要で、チーム医療においても求められている視点です。平面的な知識ではなく、サイエンスの力(考える力)を有し、他職種と対等に議論のできる薬剤師の育成が重要と考えています。そこで当研究室では週1回、共同研究している企業の方なども交え学生とディスカッションを行い、サイエンスの力を養う取り組みをしています。

人に役立つ薬を目指し天然物を探索

薬用資源学研究室の前身は昭和36年に開設された薬用植物学研究室で、主に天然資源植物から医薬品や機能性食品、化粧品などに活用できる有効成分の探索を行っています。私が研究室に入った約40年前、大学3年生の時に、前教授の久保徳先生から「論文を書くだけでなく、薬や化粧品、機能性食品を研究・開発し、人の役に立つ成果を出しなさい」と教えられました。それが私の研究の基本です。

研究は漢方医学に学んで展開しています。学内の合成化学の先生方とも連携し、また民間企業との共同研究や商品開発も進めています。一方で、漢方医学には古代からの経験が積み上げられています。当てもなく何百もの植物を調べるより、古くからある書物の記述から研究する生薬のアイデアをいただくほうが、有効成分を発見できる確率ははるかに高いのです。天然物を単に扱うのではなく、古代からの知識と新しい研究技術を融合することで、可能性がまだまだ広がります。私は学生に薬用資源や漢方に興味を持ってもらえるよう、授業では漢方のロマンを伝え、大学のロビーに季節ごとの薬用植物の写真や生薬、本草書の展示をしています。

拡大する大学の取り組み

近畿大学には四つのベンチャー企業があり、その一つである薬学部のベンチャー企業で大学発のサプリメントの販売を始めました。未熟な温州ミカン果実に含まれる成分に抗アレルギー作用・美白作用を確認し、サプリメントにしたものが一例で、「人の役に立つものを生み出す」研究の成果です。製品名に「近大」が織り込まれていますので、大学の取り組みをアピールできます。いま大学は研究成果や取得した特許を活かす新しい展開にも積極的ですから、薬剤師として活躍されている卒業生の方々に知っていただく機会があれば嬉しく思います。